

日本人・外国人観光者から見た観光地

—高山市を事例として—

大塚 寛子

現在、国の観光立国の推進を背景として、国内観光者のみならず訪日外国人観光者の誘客は大きな課題である。効果的な観光者の誘致のためには、観光者の視点を明らかにすることが必要である。

観光者の視点から、観光行動を3段階に分け一連の動きを明らかにする。各段階で日本人・外国人観光者と比較し、今後の効果的な観光振興に繋がる提言をすることを目的とする。第1段階（観光前）では、観光行動の核である「観光者の動機」を明らかにする。第2段階（観光中）では、観光者に「高山らしい」と感じた場面をカメラで撮影してもらい、「現地をみるまなざし」を把握する。第3段階（観光後）では、観光前後で観光者の抱く観光地のイメージの変化を明らかにする。イメージは観光地の評価にも繋がるため、観光地の長所、短所、課題を見出すことができると考えた。事例を岐阜県高山市とする。高山市は、国内大衆観光地から国際地への発展途中の観光地であり、日本人観光者と外国人観光者の比較調査を行うには、調査が十分にできると考えられる。

本調査の結果、それぞれの段階で日本人・外国人観光者の

間での類似点、差異が明らかになった。

各段階の結果から、効果的な観光振興に向けた取り組みに繋げる考察を行う。第1段階より、日本人には「親しい人と触れ合いを行う場所として高山市が魅力的であること」のPRと、「食べ物がおいしい」という魅力を発信することが重要でたと伺える。外国人には、「神社仏閣」を観光資源として活用し、観光地で地元の人と触れ合う機会を作ることが有効だといえる。第2段階より、日本人は同行者や飲食店を多く撮影していたことから、「高山市で経験できること」の提示を行うことが効果的だと考える。外国人は、インフラと神社仏閣を多く撮影しており、実用的な道路標識等の「高山らしい」インフラの整備を維持していくことが大切であろう。